

エントリー名：愛知県豊橋市立大清水小学校

活動名：地上の楽園プロジェクト

～みんなで創る。みんなが楽しい学校づくり～

解決すべき課題：昨年度までの本校は、「トラブルがおきないように」という管理主義的な雰囲気が残っており、児童に多くの制限を強いていた。その結果、抑圧されていると感じる児童による問題行動が後を絶たず、その対処に時間を費やす教職員が疲弊する様子が見られた。そして、毎年のように休職する職員がいた。そこで、今こそ、管理主義的な古い学校文化を打ち破り、子どもも大人もみんなが幸せな、「地上の楽園」と言われるような新たな学校文化を創造したいと考えた。

目標・方針：自ら学校を動かそうとする、教師・児童を育てよう！

学校全体の意識改革を図るために「人生に失敗はなし！あるのは学びだけ！」を合言葉として、新しいことに挑戦できる雰囲気を醸成する。意識は変わった教師が、勇気をもって児童に任せる場面を増やし、自分たちの意見が学校生活や行事に反映される経験を重ねていきたい。そして、児童と教師が「こんな学校にしたい」と夢を語り合う学校をめざしたい。

活動内容：

①教員の意識改革

意識改革を迫る手立てとして、昨年度まで、「トラブルが起こるから」「ゲーム機になってしまわないのでは」と使用に制限をかけていたタブレット端末の日常的な持ち帰りを行う。「まなびポケット」を使い、連絡帳を廃止し、連絡ツールとして活用したり、学校からのお便りのペーパーレス化や保護者会の日程調整をオンラインで進めたりする。教師が便利さを実感することで意識改革のきっかけとしたい。また、「デジタルシティズンシップ」についての研修会を行い、子どもたちにとってどのような力が必要なのか共通理解を図り、新しい学校文化を創造する意義を共有したい。

②児童主体の新たなまなび

これまでの一斉授業の形態からICT機器を有効活用した子どもの主体の学びへの転換を図る。まず、全職員を県内各所の先進的な取り組みをしている学校へ派遣し、情報収集を行う。そして、イメージを共有するために校内で研究授業を行う。具体的には、タブレット端末で課題に対する自分なりの考えを発信し、課題克服のために同じ意見の児童と協同したり、違う考えの児童に質問したりする学びを展開したい。「主体的で対話的で深い学び」の具現化である。その過程で、主体的に課題に向き合い、解決できる児童を育てたい。この学びの積み重ねにより自走できる児童へと高めていく。

③児童の自走

児童主体の新たなまなびで培っている力を学校生活や行事で発揮する機会を設定する。具体的には、生活のきまりの見直しや行事の運営を積極的に児童に任せていく。自分たちの意見によって学校が変わった、自分たちの力で行事を成功させたという経験の積み重ねは、プラスのスパイラルとなり、「学校をもっとこうしたい」という次への活動意欲となり、やがて、自走する児童へと成長していくと考える。また、児童の活動を支える過程で、教師自身も学校運営に自分事としてかかわる楽しさを実感し、自走する教員となることを願っている。



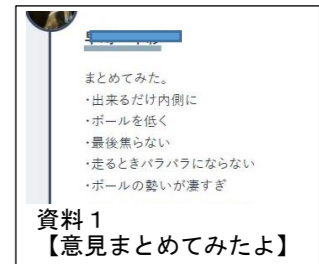
活動の過程

①「人生に失敗はなし。あるのは学びだけ。」

タブレット端末の日常的な持ち帰りを進めると、児童間でのトラブルが発生した。連絡ツールとして使っていた「まなびポケット」への不適切な投稿である。昨年度までは、このような事案が起こると、その指導に躍起となり、反省させることを目的としていた。しかし本年度は、デジタルシティズンシップの考えを基に、児童の学びの機会と捉え、対応する教師の姿があった。次第に児童もタブレット端末を自分たちの判断で活用できるアイテムだと認識し、運動会のスローガン投票をオンラインで行った。気が付くと6年生は、メッセージ機能や動画を使い、運動会の大玉送りについて作戦会議を行っていた。また、バスケットボールワールドカップでの日本代表の活躍で盛り上がると、バスケットボールの名作漫画について、子ども同士で感想を交換する姿も見られた。さらに、低学年でもきれいな虹がかかっていた翌日には、写真とメッセージで自分の感動を伝える場面が見られ、学校全体でタブレット端末を文房具として活用する雰囲気が広がっていった。

②「主体的な学び」～自らの困難に立ち向かう児童の育成～

先進校を視察した多くの教員は、本校が遅れをとっていると危機感をもって帰ってきた。一方で「そんな授業に挑戦したい」という教員もおり、手探りで授業づくりを行った。「まなびポケット」のチャンネル機能を使い、意見交換をすると、これまで発言することに抵抗感があった児童が意欲的に発信する場面が増えてきた。また、発信方法も様々で、ノートにまとめた図や表を写真で送る児童もいた。すべてタブレット端末で処理するのではなく、より伝わりやすい方法を自分で選択する姿に児童の学びに向かう変化を実感した。実践を重ねると次第に児童の中に選択肢ができ、動画を視聴し情報収集したり、友達に質問したり、自分のまとめを発信したり、自分なりに方法手段を選択し、学びを進める姿が見られるようになってきた。



資料1
【意見まとめてみたよ】

③児童の自走～自分たちで変えることができる学校～

本校には、「学校の約束」という50以上のきまりがあった。児童の実情や時代に合っていないものも含まれており、児童からの不満も聞かれた。そこで、自分たちの手で学校を変えることができる実感する機会となるべく、子どもたちの手で「新しい約束」を作ることとした。その結果、50以上あった守る項目が10項目まで減った。話し合いの過程で、「減らした内容は、自分で考え、正しいと思うことを行動しよう」という声が聞かれ、受け身ではない姿に自走への芽生えを感じた。「新しい学校の約束」づくりで、自信と自覚を持った児童たちはさらに運動会に自分たちの考えた種目を取り入れたいと声を上げた。児童会を中心に意見を出し、全校で楽しめる種目をと意見をまとめ、校長室を訪れた。〈資料1〉その他にも、あいさつを盛り上げる「あいさつマン」や「挨拶ソング」の作成など、児童が学校を盛り上げるためのアイデアが教育活動の様々な場面で見られ、まさに自走する子どもたちの姿があった。

活動の成果：

学校内でのトラブルの件数も、昨年度の同時期と比べて、半数以下となり、生徒と教師間のトラブルは1件も起きていない。教師の意識転換から始まった本校の活動は、長年の本校の課題となっていた校内トラブルの解消だけでなく、児童の自走する姿が見られるようになった。そんな児童の姿に刺激を受け、「子どもに聞いてみようか」「やってみようか」と教師側も、ICT機器を活用した授業への挑戦や、時代に合わせた宿題の取り組みの実践など、管理職から言われたからでなく、自分が正しいと思う方法で、教育活動に向かう姿勢が見られるようになった。これからは子どもも大人も命を輝かせる幸せを実感できる「地上の楽園」を作っていきたい。



資料2 「ぜひ児童会種目を！」